

ブレイドカーズ

フィクション

Fumikaru Nishijima

西島ふみかる

III 大崎シヤ (UNKNOWN GAMES)

20世紀末、世界中で奇妙な病気が蔓延した。

健康だった人々が、突然、昏睡状態に陥り、それきり意識を取り戻さない。世界各国で調査と研究が進み、患者が自分の想像の中に引きこもっていることが判明した。

患者の多くはアニメや漫画、ライトノベル、映画、ドラマ、ゲームなどに熱中していた。患者の意識を診断できる技術が開発されると、患者たちがそういったエンターテインメントの想像の中に没入し、現実に戻ってこなくなっていることがわかった。

エンターテインメント依存性昏睡。

後に、「エンタメ汚染症」と呼ばれる精神疾患の発見である。

最初は一過性のものでだろうと楽観視していた各国だったが、この疾患が感染することがわかると、事態の重大さによりやく気がついた。エンタメ汚染指数という世界指標が制定され、重篤な汚染患者は隔離する以外に方法がなかった。

21世紀半ば、世界の人口の約5%が隔離処理され、12%が要治療者となっている。

研究は進み、今では、軽度から中度汚染症患者に対して有効な治療方法が確立されていた。意識潜入治療。

患者の意識内に潜入してその想像に介入し、現実に戻す。

これが現在、エンタメ汚染症に対して人類がとり得る、唯一の治療方法である。

## プロローグ

目の前の壁には、数百もの『棺』が埋め込まれている。このこと同じ凍結施設は国内にたくさんあり、毎日、何千という人が訪れている。

ここを、この時代の墓地だという人もいる。冗談じゃない。ここは墓地なんかじゃない。

『二百五十六番でお待ちのお客さま。準備が整いましたので、九番窓口までお越しください』俺は立ち上がると窓口で受付し、電動式の移動リフトに乗る。リフトはレールの上を滑らかに移動し、音もなく停まると今度は上昇し始めた。

五メートルほど上がったところで停止する。

棺の前面が点滅し、小さな警告音が鳴った。その後、圧縮空気が吹き出す音とともに、壁から棺が飛び出てくる。がちりと半分ほど出たところで止まった。

棺は三つ。透明なカバー越しに中が見える。

その銀色の棺には、父、母、そして妹が横たわっていた。

「父さん、母さん、千瀬。久しぶり」

俺はカバーを撫で、三人の顔を覗きこむ。三年前と変わらないその姿に胸が痛くなる。俺

はジャケット内側のホルスターから銃型のデバイスを取り出した。父も持っていたそのデバイスは、身分証明であり、同時にライセンスでもあった。

——天津響。十六歳。

——厚生省健康局エンタメ汚染症対策室・意識潜入治療課・潜入官仮ライセンス。

「見てくれ、父さん。俺、潜入官のインターンになったよ。明日、入局する」

棺の中の三人は、びくりとも動かない。カバー横の赤い数値に目をやった。

『エンタメ汚染指数520』

母と妹も、同じような数値だった。

その数を見て、俺は奥歯を噛み縮める。

潜入官だった父は、ある事件に巻き込まれ、エンタメに感染した。表面上のエンタメ汚染指数が上がりにくいタイプの珍しい感染で発見が遅れた。母と妹もすぐに感染した。

たまたまその日、友達の家に泊まりに行っていた俺だけが感染をまぬがれた。

俺は三人を見つめる。

父と母、妹は、その日の夜に隔離された。エンタメ汚染指数が500を超える患者は、即時凍結処理される。感染脳波を発散し、周囲にエンタメ汚染を広げる感染源になってしまいうからだ。

治療方法が開発されるか、感染を防ぐ手立てが見つからない限り、凍結は解除されない。事

実上、父は殉職となり、母と妹も役所に凍結届けが出されている。つまり、準死亡扱いだ。ふざけるな……ふざけるなよ。

俺は認めない。俺の家族は死んでないんだ。

目を閉じ、俺は歯を食いしばる。

凍結処理されてしまった患者を治療する方法は存在しない。だが——

ライセンスをしまい、左手首に嵌めた腕時計型のデバイスに触れると、空中に小さなスクリーンが現れた。俺は家族のカルテを表示する。入局が決まったことで閲覧を許可された簡易カルテだったが、そこには症状の特徴を示す情報〈感染シグニチャ〉が記されていた。

——ピュアホワイト。

〈感染シグニチャ〉は色で表現され、特徴とともに感染原因をも含んだ重要な情報である。

「ピュアホワイト」は最新の分析技術で発見された特異な〈シグニチャ〉で、詳細はまだわかっていない。最近、増えつつある症例だと医療課の人が教えてくれた。

俺はその眩しい白を見て、拳を握り締める。

この色だ。

これが家族を感染させた。

この色を追えば、感染の原因に辿り着ける。

原因がわかれば、きつと——

俺は三人の顔をじつくりと眺めてから、リフトについている『面会おわり』のボタンを押した。プザーの音とともにリフトが戻り、俺は凍結施設の広いロビーを後にする。

バスの停留所から眺める施設は巨大な円筒形で、煙突にも似ていた。まるで墓標のようだ、という人もいる。でも俺はそんなことは思わない。思うわけがない。

なぜなら、俺の家族は生きているからだ。

父さん、母さん、千瀬——

待っていてくれ。

俺は、この色を追う。

感染の原因を探り、みんなを治す方法を見つける。

俺だって、簡単に治療方法が見つかるなんて思ってるわけじゃない。でも——

俺にはこれしかない。この手がかりしかないんだ。

また家族で暮らせる日がくる。

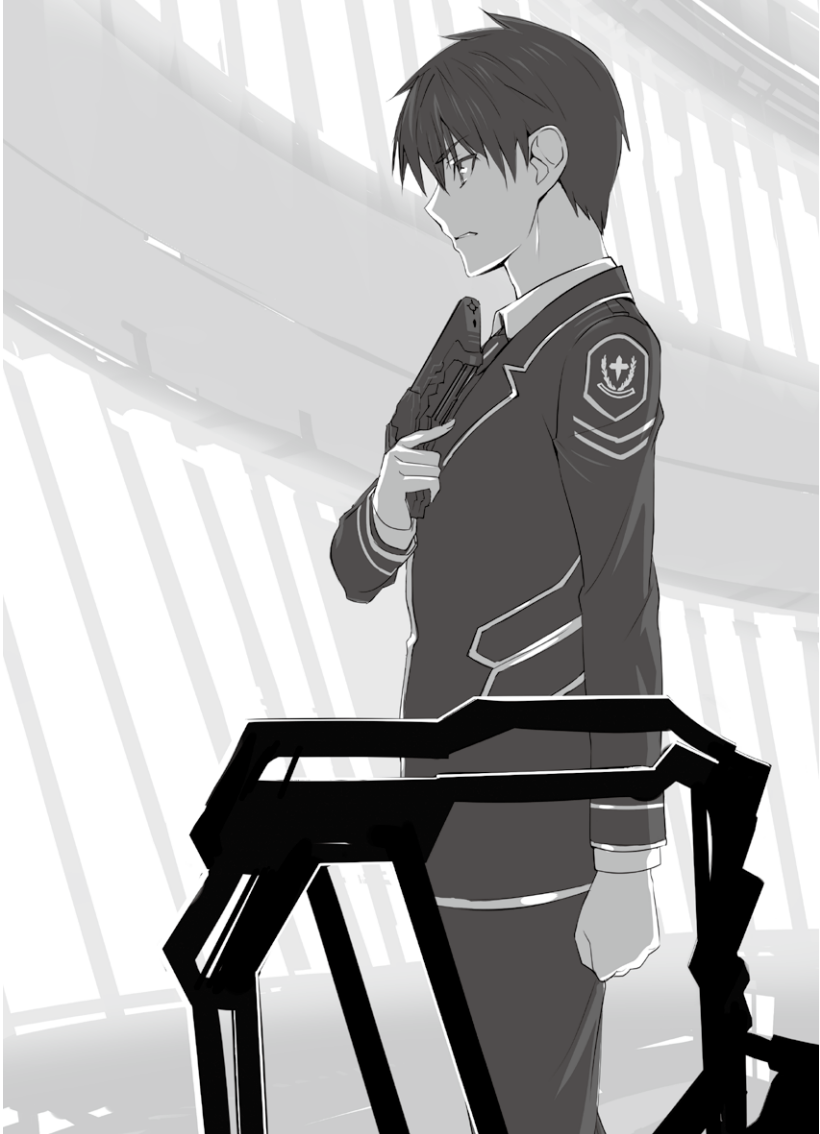
一緒に笑える日がくる。

それまで、ほんの少しだけ、待っていてほしい。

俺が必ず——

ざりりと奥歯を噛んだ。

——治療方法を見つけてみせる。



「——くん、響くん。朝ですよ。起きてください」

毎度のことながら呼び掛けに応じない幼なじみを前に、彼女は軽いため息をついた。部屋を見回すと、ゲーム機のコントローラーや空のペットボトル、お菓子の袋などが散乱している。雑誌や服も出しっぱなしで部屋は散らかっていた。

また、夜遅くまでゲームしてたんだ……これだから男子は——

彼女——水嶋優は床に脱ぎ散らかしてあった服やゴミを片付けながら、再び声を掛ける。

「ねえ、響くん。そろそろ起きないと、また遅刻しちゃうよ？」

寝返りを打つ幼なじみの顔を見て、優は思わず微笑んだ。そろそろとベッドに近づき、腰を下ろす。ちよつと思いついて、つんつんとほったたをつついてみた。

「んん……」

ふふ……。優はためらいがちに手を伸ばし、幼なじみの前髪にそつと触れる。少し硬めの髪質で、たまに寝癖がついている。優は、彼がくしゃりと髪の毛を掻き上げる癖が好きだった。

わ、睫毛長い……肌もつるつる……髭も生えてない……。

優は知らず知らずに顔を近づけ、幼なじみの寝顔を覗きこむ。

「無防備な寝顔……いいの？　こんな無防備で……。私が来ること、わかってるくせに——」

「響くん、起きてる？　それともまだ……寝てる？」  
さらに顔を近づけると、シャンプーの香りに混じって微かな汗の匂いがした。あ——その匂いを嗅いだ途端、何だか胸の奥が苦しくなった。ちよつと前まで同じくらいの背だったのに、今では私を追い抜いて、いつの間にか男っぽくなって……。

唇を舐め、顔を近づけていく。

響くんが……悪いんだよ……？　そんな無防備な顔で寝てるから……だから、私——

優は目を閉じ、唇を軽く突き出す。

響……。

「——おい」

——え？

優が目を開けると、幼なじみがまだ眠そうな目で彼女を見ていた。

わわっ！　弾かれたように体を起こすと、勢い余って床に尻もちをついた。

「いったあっ——」

「お前……何してるんだ？」

優は照れ隠しに大きな声を上げた。

「響くんが悪いんでしょ！　すぐ起きないからっ、もう！」  
幼なじみの彼は、頭を掻いて一度あくびをすると彼女に目を向けた。

「見えてるぞ」

「は？　なにがよ？」

「だから……パン——」

そこまで聞いたところで優はすぐに気がついた。パツとスカートを直し、足を閉じる。見る間に顔が真っ赤に染まっていく。菌を食いしばって一度彼を睨みつけると、その体勢のままベッドを蹴った。

「馬鹿！　変態！　朝ナマっ!!」

「朝ナマってなんだよ……」

「うるさい！　このパンツ星人！　パンツ星人はパンツ星に帰れっ！　帰ってよ、もうっ！」

「なにを言ってるんだ……?」

恥ずかしさのあまりベッドをどすんどすん蹴る。優は彼を睨みつけて立ち上がると、扉へと駆けた。振り返って大声を上げる。

「そんなにパンツが好きなら、パンツと一緒に死ねばいいでしょ！　パン死しなさいよっ！」  
ばたんつと大きな音をさせて扉を閉めた。

優ははあはあ息を荒らげて、扉に寄り掛かる。今、自分が叫んだ言葉に、猛烈な恥ずかしさ

が込み上げた。

うう……パン死って……私、何言ってるの……ううう……。

顔を両手で覆い、階段を駆け降りた。

馬鹿……私の馬鹿！　……ううん、悪いのは響くんよ！　そうよ、私は悪くないんだから！  
どたどたと階下に降りる優。

彼女は恥ずかしさのあまり言動がおかしくなる系の、ちょっと変わった女の子だった。

「じゃあ、おばさま。いってまいります」

「優ちゃん、いつもありがとうね。響のこと、よろしくお願いします」

「い、いいえ！　その……こちらこそ」

「こら響！　優ちゃんにお礼いなさいよ？　お弁当まで作ってくれてるんだから。そんな子、金輪際、あんたの周りに現れないからね！　ちゃんと掴まえておかなきゃ駄目よ！」

彼女は恥ずかしそうに身を縮めると、顔を伏せた。

「そんな……。私は好きでやってるだけです……」

「わかってる、わかってる。じゃあ、いってらっしゃい」

「はい、いってまいります」

彼女が頭を下げるのを横目で見て、天津響は歩き始める。

住宅街を少し歩いてから、用水路横の道へと曲がる。いつもの近道だ。

人気ひとけが少なく、用水路を流れる水の音と、街路樹の葉が風に揺れる音だけが聞こえる。心地いい風が吹き抜けていった。

天津響は道の途中で立ち止まり、ゆっくりと振り向く。

意志の強そうな眉、その下の強い瞳に、彼女は動揺する素振りそぶを見せた。

二人の間を風が通り過ぎる。彼女は、ふわりと舞った髪の毛を耳の後ろに掻き上げた。

「えっと……なに……かな?」

「お前、水嶋優だな」

「え? そ、そうだけど……どうしたの、響く——」

響は返事を最後まで待たずに、シヨルターホルスターから銃型のデバイスを取り出す。右手に握られたデバイスは「イマジントリガー」。構えて引き金を引くと、響は叫んだ。

「想像現実性武装——出ろ! ベレッタPx4!」

手の中の「イマジントリガー」にびしりと亀裂が入る。内側から漏れる青い光。亀裂に沿って銃が割れ、変形していく。小気味良い音とともに、銃はバズルのように展開され、折りたたまれ、伸縮し、積み重なり、形を取り始める。それぞれの部位が、バレルへ、マガジンへ、スライド、グリップ、弾丸へと変形し、確かな質感を伴って、響の手の中で実体化した。

コンパクトな自動拳銃、ベレッタPx4。一度グリップを握り直すと、斜めに構えるウイー

バースタンスで、驚いている彼女に銃口を向ける。

「ここは、お前がいるべきところじゃない」

ひっと息をのむ彼女。

「目を覚ませ!」

響は躊躇ちゅうちよなく、連続して引き金を引いた。鋭いブローバック。頭に二発、胸に二発の正確な射撃。

しかし——9ミリのパラベラム弾が彼女に当たる寸前——

「なっ!」

彼女は、残像が残るほどの速度で上半身を動かし、弾をすべてかわした。

響は目を大きく見開く。辺りに静寂が戻った。

「あなた……」

彼女がじっと響を睨む。

「私の幼なじみじゃ、ない!」

彼女は身を翻ひるがえし、駆け出した。

しまった——有無を言わず撃つべきだった!

走り出した彼女を追って、響も地面を蹴る。用水路横の狭い道を抜けて住宅街に戻ると、左右を見回した。どこにも彼女の姿がない。

「どこに行った!? おい! 水嶋優の位置を教えてください——獅子堂!」  
 「……監視官の許可なく(武装)を使うなんて……一体どういうつもりなの? 天津潜入官」  
 「俺は早く、あいつをここから出してやりたいだけだ!」

しばらくの沈黙の後、頭が響いた。  
 『潜入治療の基本も知らないの? ターゲットに気づかれて異物だと認識されれば、あちらも排除行動に出るのよ? そこは彼女の世界なのだから。この潜入は失敗よ。——担当官、切断準備』

「待ってくれ! もう少し! もう少しだけやらせてくれ!」

『無駄なことは止めなさい。患者に気づかれた場合の治療成功率は3%以下よ』

「ゼロじゃないんだろう!」

小さなため息の後、声が響いた。

「……いいでしょう。その行動の無意味さと自身の無力さを、そこでしっかり認識するといひ。どうせ指示には従わないのだから、私はサポートしない。……ただし、危険な状況になれば強制的に切断する。いいわね? 潜入官との通信終わり」

「わかった……俺一人で十分だ!」

響は銃を両手で持ち直すと、住宅街を一人駆ける——

ここは現実の世界ではない。

水嶋優の意識の中。想像の世界——虚構性意識想像界。

意識潜入治療では、患者の想像世界のことを(フィクション)と呼んでいる。

天津響は潜入官として、初めての潜入治療を行っていた。現実の響は、治療用の接続端末から、患者である水嶋優の意識に潜入中である。

患者を(フィクション)から助け出すにはさまざまな方法があるが、響が試みた銃撃による武装介入は、いわゆるショック療法である。銃弾を受けても、患者の体が傷つくことはない。しかし、精神には衝撃を受ける。その衝撃によって患者を現実へと引き戻す。例えてみれば、昏倒した患者に平手打ちをして目覚めさせるような方法である。

単純ではあるが、一定の効果があり、しかも迅速な治療が行える。

響は一刻も早く、彼女をここから出してやりたかった。  
 どこだ? どこに行った?」

銃を構えたまま左右を見回す。遙か彼方まで住宅街が広がっていた。塀と電柱、同じような家屋と同じような庭木。どこを見ても同じ風景。まるで迷路のようだった。響はベレッタのグリップで塀をこすり、一度来たところに印をつけながら慎重に進む。

響は自分に言い聞かせる。

何の変哲もない住宅街だが、ここは意識の中。水嶋優を主人公とする(フィクション)だ。油断するな!



堀の角を曲がったところで——なんだ？——響は立ち止まり、目を細めた。

道の向こうから、何かが尋常ではない速度で迫ってくる。

あれは——

「遅刻、遅刻、遅刻ううううっ！」

えっ!?

食パンをくわえた女子高校生が猛スピードで目の前を通り過ぎ、響は飛び退いた。なっ！走り去った方向に目をやると、もう高校生の姿は見えない。

なんて速度だ——ぶつかれば、ただじゃ済まなかった。そう思った矢先——

「遅刻、遅刻、遅刻うっ！」「遅刻、遅刻、遅刻うっ！」「遅刻、遅刻、遅刻うっ！」「遅刻、遅刻、遅刻うっ！」「遅刻、遅刻、遅刻うっ！」

な、なにいい!?

道の向こうから何百という女子高校生が、食パンをくわえて、信じられない速度で駆けてきた。もうもうと土煙が上がる。さながら女子高校生の津波だった。

な……ど、どうするっ!?

彼女たちはすでに目前。銃撃も考えたが、ベレッタのストップピングパワーでは彼女たちを止められないことは一目瞭然だった。後方へ逃げようにも、彼女たちは道幅いっぱいには広がっており、すぐに追いつかれて潰される。

響は手の中のベレッタに一瞬目をやる。

——覚悟を、決めろ！

彼女たちの足音が大音量で迫る。土煙を上げ、猛烈な速度で近づく。もう距離がない。あと

十メートル。五メートル——

響はベレッタを女子高校生たちに向け、叫んだ。

「想像現実性武装——来い！ フックショット!!」

ベレッタが変形する。凄まじい速度で組み変わる。同じく銃型ながら、リールとワイヤー、先端には鋭いフックが現れた。

フックショット——フックのついたワイヤーを壁や屋根などに発射し、ワイヤーを巻き取ることで、そこまで高速移動するという、20世紀末のアクションゲームでよく見られた装備である。

よしっ！

女子高校生たちに轢かれる寸前、響は家屋の二階ベランダに向け、フックショットを放つ。

フックのついたワイヤーがベランダの手すりに掛かると——

引けっ！

巻取りボタンを押すと爆発的な勢いでワイヤーが巻かれ、体が引っ張られた。ぐううっ！迫ってくる堀に足を掛け、堀の上でジャンプする。ワイヤーに引かれ、猛スピードで宙を飛ぶ

響。ペランダが迫る。もう目前——ここ！ペランダに激突する直前、響は巻き取りボタンをオフにし、そのままの勢いで屋根に着地した。屋根がぐしゃりとへこむ。体全体のバネを使い衝撃を逃がした。

振り返って下を見ると、女子高校生の群れが響が立っていた辺りを駆け抜けていくところだった。群れの長さは十メートルはある。

響は背中に冷や汗がにじむのを感じた。

危なかった……。あそこにいたら命が無かった——

立ち上がったところで——つうつ！ようやく肩の激痛に気づいた。フックショットの勢いで、肩関節が脱臼しかかっていたのだ。痛みに片膝をついた響だったが、歯を食いしばって顔を上げる。あいつはどこだ!? 辺りを見回すと、女子高校生の群れの後方に一人、逆方向に走っていく女子生徒の姿を見つけた。

スカートを翻し、逃げるように駆けていく後ろ姿。

いた——

響は痛みを無視して立ち上がる。両手でフックショットを構えると——

「見つけたぞ！水嶋優！」

バシユッ！

彼女の近くの電柱に向けて、フックを発射する。絡まったことを確認し——

「待てっ！」

ボタンを押すと、また強烈な勢いで体が引つ張られた。肩が千切れそうになる。腕がもげそうになる。それでも——

「うおおおおおっ！」

響はワイヤーに引つ張られて宙を飛び、電柱に激突する直前でボタンをオフにする。勢いを殺しきれず、腕でガードしながら電柱にぶつかると。ぐっ！電柱上部に絡まったフックショットをやむなく手放し、地面に着地した。痛みに歯を食いしばりながら立ち上がり、周りを素早く見回す。目の前の路地を走っていく女子生徒の姿が見えた。

逃がすかつ！

痛みを無視して、地面を蹴る。

「待て！水嶋優！」

追いかける。水嶋優の後ろ姿が近づく。手を伸ばし、肩に手を掛ける——

「ここはお前がいるべき世界じゃ——」

しかし——なっ!?

振り向かせたその顔は——水嶋優ではなかった。無個性で、没個性で、どこにでもいる、平均的で、平凡な、その顔。これは——響の顔が歪む。思わず歯を食いしばった。

モブキャラ——やられたっ！

ふっと、道に大きな影が落ちる。  
な、なんだ!?

その巨大な影は、響を覆い隠すように広がっていく。  
見上げると、そこには――

なにいつ!?

巨大な女子生徒、水嶋優の姿があった。

ざろりと彼女が響を見下ろす。彼女の顔が歪み、歯を剥き出しにした。

「あんなあぁ――いまあぁ――パンツうう、見たでしょおおお――」

大きな、太い声が天から響く。確かにパンツは見えていた。小さいリボンのついた薄いブルーの可愛いパンツだった。

そりゃ、見えるだろおっ!

彼女が響をまたぐ。巨大な柱のような足の奥に、薄青の布が見えた。

「そんなにパンツが好きならあぁあぁ――パン死すればいいじゃないいいいい――」

しまった! フックショットは電柱に絡まったままである。くっ! 響は彼女の下から逃れようと駆け出す。

彼女が腰を下ろしてくる。影が濃くなる。スカートが大きく翻り、凄まじい突風が起こった。頭上に青が迫る。

まだ……まだだっ!

迫る青を横目に見ながら、響は全力で駆ける。

絶対――絶対に助ける!

『担当者。強制切断』

『――強制切断……ですか? 通常の切断処理でも間に合いますが……』

(フィックション)から現実へ戻る操作である切断処理には、通常切断と強制切断の二つがある。強制切断は緊急時に行われる操作であり、いくつかの処理を抜かすため、切断時に潜入官は強い衝撃を受ける。それは、全身を大きな手で平手打ちされたような感覚だという。

『ミスした者には相応の罰が必要でしょう?』

医療担当官が小さなため息をついた。

これは、ベテラン監視官がへまをした新人潜入官によくやる「ぶん殴って、目を覚まさせる」慣習である。

しばらくの逡巡の後、医療担当官の声が聞こえた。

『――了解しました。強制切断を実行します』

――俺が、あいつを助けるんだ!

響が巨大な青に潰される瞬間――

『――強制切断。実行』

「……また、使えない潜入官ね……」

そんな声が頭の中でした後——響は大きな衝撃を受け、意識は闇に閉ざされた。

\* \* \*

「なぜこうなったのか、何か釈明はあるかね？」

チームを組んで初めての意識潜入治療に失敗した二人は、管理官室に呼び出されていた。部屋は支局ビルの上階にあり、管理官の背後の窓から市内が一望できる。

久能管理官の鋭い視線を受けて、インタンスリップで入局したばかりの響は、居心地の悪い思いをしていた。

久能ちぎら——支局全体を指揮する管理官であり、潜入治療課課長も兼任する才媛さいえん。弱冠三十歳でこのポストに就いたのは、潜入治療が行われて以来、初めてのことである。

長い濃紺のうこんの髪の毛をアップにしてまとめている。若く見える顔立ちだったが、その切れ長の目は鋭く、彼女に睨まれるとベテランの局員すら震え上がるという。

ここは厚生省健康局に属する機関。

エンタメ汚染症対策室・関東第二支局。

違法エンタメコンテンツの摘発と、エンタメ汚染症の治療および研究を行う政府機関である。

隣接する医療センターは、エンタメ汚染症対策のために特別に設立された医療施設であり、当支局と連携して事態にあたっている。

押し黙っている二人を見て、久能管理官は天津響に目を向けた。

「天津響潜入官。怪我けがの具合はどうか」

「はっ。大したことはありません。肩と足を打撲した程度です」

響は右肩と左足を、ギブス状の医療補助具で固定されていた。

潜入官は患者の意識に潜入する役職だが、潜入時に負った傷は現実にも反映される。脳は精神的ダメージを、肉体的なダメージとして認識するからである。

「獅子堂世莉監視官」

「はい」

響の隣で硬い表情をしていた女性治療官が返事をした。

獅子堂世莉。十六歳。響と同じ年だが、飛び級で一年早くインタンスとして入局した監視官である。彼女の監視官適性スコアは久能管理官に迫るものであり、幹部候補生としても注目を集めていた。

長い髪を綺麗きれいに後ろでまとめ、制服も隙無く着こなしている。やや吊り上がった目は勝ち気そうで、まるで気位の高い猫のようだった。極めて整った顔立ちをしていたが、冷たく硬い表情のおかげで、彼女の美しさはかなり損なわれていた。

すでに実務経験があり、何人かの潜入官とチームを組んだが、誰も彼女の高度な指示についていけなかった。そんな彼女に、久能管理官は、新人の天津響と組むよう命じたのである。

「潜入官への指示を怠ったそうだが？」

「天津潜入官が、私の治療計画を無視したからです」

久能管理官は、とんとんと指でテーブルを叩く。

「だから、腹いせに指示を出さなかったと？」

獅子堂世莉は一瞬、奥歯を噛み締めるような表情を見せた。

「彼は自分の力量もわきまきまえず独断で行動し、あけく自身も負傷しました。私は彼の能力に疑問を抱いています」

「なんだと……？」

睨む響を、世莉は完全に無視した。バンツと管理官がテーブルを叩く。

「獅子堂監視官。潜入治療はなぜ二人でチームを組んで行う？」

「……潜入官が現場で動くのを、監視官がサポートし、想像と現実両面から患者に対し適切な治療を行うためです」

「そうだ。今回の君の行動は、その原則に従っていたかね？」

世莉は管理官を一度強く睨んだ後、顔を伏せた。

「……いいえ」

「では、改善したまえ」

「……はい」

久能管理官が世莉を一瞥した後、今度は響に目をやった。

「天津潜入官」

「は、はいっ！」

「想像現実性武装を使ったそうだな。しかも二度も」

響はごくりと唾を飲み込んだ。

「……はい……」

「過剰治療だ」

その冷たい口調に、響の背筋が震えた。

過剰治療とは、症状に対して不必要な医療介入を行うことである。

「君はただ、〈武装〉を使ってみたかっただけではないのか？」

キツと響は管理官を思わず睨んだ。

「いいえっ！俺……自分はまだ！できるだけ早く——」

バンツとテーブルを叩くと、管理官が立ち上がった。響は決して背が高いわけでもない彼女に、気圧されるように後退りする。

「想像現実性武装は確かに有用だ。症状によっては絶対に必要な措置でもある。だが、あの場

面で必要だったと本当に思うかね？ この案件は武装介入するほどの案件か？ それに——」  
管理官は目を細めた。

「武装の具現化が危険を伴うとわかっているようなら、潜入治療の基礎からやり直したまえ！」

響は口を開いて反論しようとしたが、歯を食いしばって顔を伏せた。

想像現実性武装——潜入治療官ライセンスにもなっている〈イマジントリガー〉を媒体に、患者の意識内で武器を具現化する技術である。自身のエンタメ想像力を使うため、確実にエンタメ汚染指数が上昇する。感染の危険と隣合わせの諸刃の剣だった。

「それで……エンタメ汚染指数はどうか？」

響は左腕に嵌めた腕時計型のデバイスに目をやる。

「90で正常値です」

隣の世莉が信じられないという目で響を見た。

「〈武装〉を二度使ってその数値とは……驚異的なエンタメ耐性だ。これほどの汚染回復力を私は見たことがない。……そうか、お父上も耐性の高い方だったな」

「……はい」

久能管理官は、父の教え子だったと響は聞いていた。それもあって、響はここ、関東第二支局をインタン先に選んだのである。

しばらくして管理官は椅子に座ると、テーブルの上で手を組んだ。

「二人とも、チームで現場に出るのは時期尚早だったか？」

「いえっ！ 自分はやれます！ もう一度チャンスをください！」

「私も、もう一度機会をくだされば、自分の能力を証明してみせます」

久能管理官はじつと二人を見つめると、ふっと息をついた。

「わかった。兩名ともスパーバイザーと面談したまえ」

「はっ」「はい」

管理官は椅子を回し、窓の外を眺める。

「この国のエンタメ汚染症患者数は、世界でワースト記録を更新し続けている。原因は何かね？」

顔を見合わせた二人だったが、答えたのは世莉だった。

「アニメ、漫画、ライトノベルの第一種危険エンタメ類が普及していたためです」

「そうだ。欧米では映画、ドラマ、ゲームの第二種コンテンツが多かった。これらは中毒性が低く、感染力も弱い——それに比べて、第一種コンテンツの依存性、感染力は驚異的だ」

管理官は息をついて続ける。

「エンタメコンテンツが禁止されて何年になる？」

「はっ。今年で三十五年です」

今度は響が答えた。21世紀初頭にエンタメ作品は有害物指定となり、今では文科省推奨の合法エンタメコンテンツしか供給されていない。しかし、今でもネットや闇市場では違法エンタメ作品が取引されており、大きな社会問題になっていた。

「エンタメ汚染症の発症原因を言ってみたまえ」

管理官の問いに、世莉が答えた。

「エンタメコンテンツとの直接接触と、患者からの感染です」

久能管理官がうなずく。

「そのとおり。エンタメコンテンツとの常時接触は、脳の状態変異を誘発し、最終的にエンタメ汚染症を引き起こす——これが接触による直接発症。そして発症者は、周囲に感染脳波を撒き散らし、その脳波と同調した者の脳を発症者と同じ状態にする——これが感染だ。感染した者はやがて発症し、感染を広げ、さらに患者を増やしていく……我々はこの負の連鎖を、どこかで断ち切らなければならない」

響は管理官の言葉に深くうなずいた。

各国政府は躍起になって、違法エンタメコンテンツ撲滅のために動いているが、違法コンテンツの取引はますます巧妙に、悪質になっており、今では子供でも、比較的簡単に違法コンテンツを手に入れることができる。違法なエンタメに手を出した子供たちは、さらなる刺激的なコンテンツを求め、最終的にエンタメ汚染症を発症し——感染を広げていく。

こうしてエンタメ汚染はますます拡大し、感染者も増え続けているというのが現状だった。

「我々の職務は何だ？」

「はっ。エンタメを根絶することですっ！」

響が答えると、管理官は椅子を回して、横目で響を見る。

「対策室全体ではそうだ。だが我々、潜入治療課は違う。各課を、敵の侵入を防ぐ<sup>とりで</sup>砦だと考えたまえ。捜査課は第一の砦——違法コンテンツを摘発し、発症の原因を断つ。予防課・医療課は第二の砦——汚染症の発症、感染を防ぐ。そして潜入治療課は、第三の砦だ。二つの砦でも防ぎきれず発症してしまった患者を、速やかにその妄想から解放し、正常な現実へと引き戻す——それが我々の責務。潜入治療課こそが最後の砦なのだ」

「はっ！」

管理官は正面を向くと、二人を見つめた。

「今回の失態については後日ペナルティを言い渡す。兩名とも下がってよろしい」

「はっ」「はい」

響の後を追って部屋を出ていこうとする世莉に、管理官が声を掛けた。

「獅子堂監視官——」

世莉は立ち止まる。

「君を、天津と組ませた理由がわかるかね？」

「わかりません」

管理官はしばらく世莉に目をやってから、ふうとため息をついた。

「君は管理官ポストを目指していると聞く。そんなこともわからないようでは——管理官はもちろんのこと、治療班の班長にすらなれないだろう。君には明らかに足りないものがある」

世莉は唇を噛んで、不服そうに顔を伏せた。

「もつと彼を上手く扱いたまえ。私を失望させるな」

「……はい。失礼します」

世莉は奥歯を噛み締めたような表情のまま、管理官室を出た。

廊下で待っていた響は、世莉が出てくるのを見て歩き始めた。世莉も黙ってついていく。エレベーターに乗り込むと、二人はじつと階の表示が動くのを睨んだ。

対策室支局は、通常、以下のように編成されている。

- ・予防課          エンタメ汚染予防のための啓蒙活動や教育を行う。
- ・捜査課          違法エンタメコンテンツの不法所持や取引などを摘発する。
- ・潜入治療課   汚染症患者への意識潜入治療を行う。
- ・医療課          潜入治療の補佐、薬物療法、患者のセラピーほか、汚染症の研究を行う。

- ・分析課          治療上必要になるさまざまな分析作業、患者のプロファイリングなどを行う。
- ・開発課          潜入治療関連の技術開発を行う。

関東第二支局ビルは、上階に上級局員の個室があり、中層には分析課、捜査課のオフィス、大きめの会議室などがある。一、二階は受付や支局オフィス、カフェスペースや局員食堂があり、地階には潜入治療室、経過観察室、開発課などが配置されている。医療課、予防課は隣接する医療センター内にあった。

支局ビルの隣には、研究生や局員候補生たちの寮があり、響や世莉もそこで暮らしている。この時代、十年間の義務教育を終えると職業適性診断を受け、インターンシップで就労を始めるのが一般的になっていた。

エレベーター内での沈黙に耐えられなくなった響は、一度ため息をついてから口を開く。

「……なにか言ったらどうなんだ？」

しばらくの沈黙の後、世莉が答えた。

「そうね……あなたがあれほど無能だと気づいていなかったのは、私の認識不足だった」

「なに……？」

世莉は凄む響を完全に無視して続ける。

「どうしてあんななかとチームを組まされたのか、ずっと考えていたのだけれど……. . . . .」



くわかってきたわ」

「文句があるなら、チーム編成を替えてもらえばいいだろう?」

「もちろん何度も上申した。でも却下された。つまり……これはテストなのよ」

「テスト?」

世莉は面倒くさそうに響にちらりと目をやった。

「あなたみたいな無能を、上手く扱えるかどうかのテスト」

「……なんだよそれ」

「私は、こんなところでぐずぐずしてられないの」

響は世莉の肩を掴んだ。

「おい! お前、何様だ! どれだけ自分が優秀だと思ってるんだ!?!」

世莉は乱暴に響の手を払う。

「私の監視官適性スコアは930よ。あなたは?」

「スコアなんて、関係あるか!」

「スコアの低い人はみんなそう言うのよ。あなたなんてエンタメ耐性が高いだけでしょ?」

それともあれ? コネでも使って入局した? 家族が局員だといいわね」

響は世莉の左手首を掴み、振り向かせる。

「ちよつと……なによ」

顔を怒りに歪めて、世莉を睨みつける。

「俺の家族のことを、部外者が語るな」

しかし、世莉は動じない。逆に響を睨み返した。

「家族にエンタメ汚染症患者がいるのが、自分だけだとも思ってるの? おめでたいわね」

「なに?」

チンツと音がして、エレベーターは一階に到着した。睨み合う二人。扉が開くと、そこに、柔らかな顔をした男性が立っていた。

「あれれ、二人とも。どういう状況?」

「あ……八神先輩」

響が口を開くと、男はほわつと笑みを作った。その力の抜けた笑みを見て、二人はなんだか気を削がれる。

「久能管理官から聞いているよ。これから少し話そうか」

八神雪村。二十二歳。先輩の潜入官で、響と世莉の指導役、スーパーバイザーでもある。

背が高く、スリムな体型。やや癖のある髪の毛はふわりとまとめられ、彼の印象をさらに柔らかいものにしていた。少し垂れた目を細め、二人を見る。

「私は少し休んでから伺います。では」

世莉は目礼すると、さっさと寮の方へ歩いて行ってしまった。



「獅子堂の奴……」

世莉の背中を見送ると、八神が口を開いた。

「まあ、いいじゃない。ちらっと話すだけだからカフェでいいよね。じゃあ行くかうか」  
響はうなずいて、八神の後についていく。世莉が消えた廊下の先を一瞬だけ睨んだ。

一階のカフェは広々としていて、午後のこの時間、一休みする局員の姿がかなり見られた。上級局員、一般局員、事務系局員、医療課、開発課スタッフ、研究員など制服はさまざまで、響たち潜入治療官は、黒を基調としたスーツ状の制服を着ていた。

響が姿を見せると局員たちが目配せし、ひそひそと何か囁く。居心地の悪さを感じながら、響は八神の後を追った。

「おーい！ 雪村。響。こっちや、こっち！」

カフェに大声が響き渡り、皆の視線が集まった。八神は苦笑したものの、にこやかな表情を崩さず声の主に近づいた。

そこにいたのはあぐらをかいて椅子に座る女性治療官。

「響、聞いたで。あんた、いきなり武装介入したって？ あははっ。わらけるわー！」

「佐々、ちよっと声のボリューム大きいんじゃない？」

「なんや、雪村。うるさいなあ。はよ、座りい。響はこっちこい」

響が隣に座ると、ぐいっと肩に手を回してくる。

「なんですか、佐々先輩。いつもいつも。やめてくださいよ」

「ほんまは嬉しくせにー。このむっつりー」

佐々六花。二十三歳。八神雪村と組んでいる監視官である。少し赤みがかかった髪はミディアムショートで、快活な彼女によく似合っていた。ころころと変わる表情と大きな声。胸元は女性らしく大きく盛り上がっている。がさつなところもあったが、面倒見のいい姉御肌の女性である。

「で、響。何を具現化したん？」

大きい胸をぐいぐい押し付けられて、響は顔を背けて答える。

「ベレッタですけど……Px4」

「はっ！ えらいクラシカルなもん出したなあ。ま、実用的やけど。資料室で見たんか？」

響はうなずく。局内の資料室には、古今東西のエンタメに出てきた武器の資料があり、響はたまにそれを読んだりしていた。

ベレッタのほかにフックショットまで具現化したことは黙っておいた。

「んで、汚染指数は？」

響は六花から身を離して、デバイスを見る。すでに80に下がっていた。六花はデバイスを覗きこむと、大きな声を上げた。

「80ってあんた……〈武装〉を使ってその数値は回復早すぎやろ？ ふつーそこまで下がるのに三、四日はかかるで？」

潜入治療は患者のエンタメ想像力と同調する治療方法であり、潜入官には汚染の危険が常につきまとう。潜入によるエンタメ汚染指数の増加は80から120ほどで、通常、回復には二、三日を要する。よって潜入治療は、一週間に二回が限界とされていた。

想像現実性武装は、患者の想像に武装介入するには欠かせない手段だが、使用による汚染値の増加は50から200ほど。潜入による汚染値と加算されるため、エンタメ耐性の高い潜入官にしか使えない技能である。

「支局のみんなにも、もう噂が広がっているみたいだね。新人がいきなり〈武装〉を使ったて」

八神が周りを見ながら口を開く。ひそひそと皆が言い合っているのは、そのことだった。

「……で、何でそんなもん使ったんや？」

目を細めて聞く六花を見て、響は強く息を吐いた。

「俺はできるだけ早く患者をあそこから助け出したかったんです。それには武装介入してシヨックを与えるのが一番早いじゃないですか！ ……でも管理官は過剰治療だって——」

「あはっ！ なるほどなあ。まあ、あんたの言うこともわからんでもないけど」

六花は八神と目を見合わせる。

八神は何度かうなずくと、ゆつくりと論すように話した。

「いいかい天津くん。患者さんを救いたい気持ちにはよくわかる。君のご家族の事情は知ってるし、お父さんのことも局員なら誰でも知ってる。あの久能管理官を育てた方だからね」

響はぐつと唇を噛んで顔を伏せた。

「でもね。武装介入は万能じゃない。症状との相性もある。使いどころを間違えてはいけないよ。管理官が言いたいのは『使うべき時に使いなさい』ということじゃないかな。君はまだ、使うべき時がわかってない。経験が足りないのだから、それは仕方がないよ。でも焦ることはないんだ。これから少しずつ学んでいけばいい」

「……はい」

響は小さく答える。奥歯を噛み締め、テーブルを睨みつけた。

その様子を見かねたのか、六花がまた響の肩に手を回す。

「まあ、ええやんか。そんな説教されんでもわかっつてるよな、響」

「ちよつと先輩……また」

「初戦で〈武装〉使う奴なんて、めったにおらんで？ 見どころあるわ！」

八神がやや困り顔で、六花に目をやった。六花は微かにたじろぐ。

「なんや雪村……なんか言いたいことあるんか？」

「僕たちは天津くんと獅子堂さんのスパーバイザーなんだよ？ その意見は偏りすぎてるん

じゃない？」

六花はぐい響を引き寄せ、ぐりぐりと頭を撫でた。

「いいの！ こいつはうちが育てる！ いや、うちが育てた！ まあ、響」

「ちよつ、やめつ、胸当たってるうぶっ！」

「なんや響、ほんとは嬉しいくせに！ うりうりうり！」

その、いつもの光景を見て、八神は軽いため息をついた。

「それにしても、あいつ、どうにかならないんでしょうか。俺とは全然合わないんですけど」

六花のヘッドロックからようやく抜けだした響は、コーヒーに口をつけながら愚痴る。

「獅子堂さんか……。数値は聞いていないけど、彼女、監視官適性スコア、トップ入局だったらしいよ。実務経験もあるし、優秀な監視官であることは間違いないね」

八神の言葉に、響は苦々しい表情でうなずく。

「あいつが優秀なのは……俺だってわかってますけど……とにかくやりにくいんです。あいつ自己中で上から目線なんで、ほんとムカつくっていうか」

ため息をつく響に、二人は面白そうに目をやった。

「先輩方はどうやって連携とってるんですか？ お二人ってあれじゃないですか、性格真逆っていうか……それでどうして上手くいってるんです？」

二人は顔を見合わせる。八神が口を開いた。

「そうだね……僕は慎重派だから、基本的に安全重視で治療する。でも、それじゃ解決しないケースもあるよね。大胆な行動が必要な時もある」

「そういう時は、うちが雪村の尻をひっぱたく。さっさとやらんかい！ ってな」

六花が口を挟むと、八神が微笑んだ。

「バランスだね、こういうのは。経験を積むうちに、自分が持っているものと、足りないものがわかってくる」

「お互いに足りひんものを補い合うちゅうわけ。二人で治療に当たるんはそういう意味やで」  
 ほんほんと話を繋<sup>つな</sup>げていく様子を見て、響は、二人の連携の良さを目の当<sup>ま</sup>たりにした思いがした。

八神雪村が潜入し、佐々六花が補佐する。性格からすると役割が逆なようにも思えるが、二人の治療成功率は局内でも随一である。

八神が顎に指を当てる。繊細な仕草で、一つ一つの動作が絵になる男だった。

「もう少し、獅子堂さんと話し合うべきじゃないかな。彼女には経験があるし、自分のやり方もある。君たちはチームなんだから、お互いを知ることから始めるのがいいと思うよ」

六花がにやにやしなから響の顔を覗きこむ。

「……なんですか？」

「ちょっと意識してるんちゃう？ 世莉はこつつう可愛いからなあ」

「はあ？ どこがですか。ああいうのは性格プスつて言うんですよ」

「性格プスねえ……ちゅうことは、顔が可愛いのは認めてるんやんなあ」

きししと笑う六花。響は嫌な顔をする。六花がパンツと響の背中を叩いた。

「ぐじぐじしとらんと、そうと決まれば行ってこいや！ 上手くいかんかったら六花お姉さんがなぐさめてやるから、な？」

「そうだね。世間話するつもりで行っておいで」

「……わかりました。ちょっと話してきます」

響はため息をついて立ち上がると、カフェを出た。

局員寮。響は世莉の部屋の前で五分ほどうろろろしていたが、そんなことをしているのも馬鹿馬鹿しく思えてきて、えいやつとチャイムを鳴らした。

「……はい」

インターフォン越しの声に答える。

「あ、俺、天津。ちよつと話せるか」  
 しばらくして、声が答えた。

「わかった」

その場でさらに五分ほど待たされて、ようやく扉が開く。  
「お前、遅い——」

文句を言おうとした響だったが、言葉に詰まってしまった。

出てきた世莉は半乾きの髪で、首からバスタオルをかけていた。どうやらシャワーを浴びていたらしい。シャンプールの甘酸っぱい香りが廊下に広がる。いつもの制服ではないジャージ姿の世莉は何だか新鮮で、響は急に居心地が悪くなった。

「なによ」

「……遅いんだよ」

「知らないわよ。あなたが勝手に来たんでしょ？ ……それで、話って？」

思わず扉を見た響に、世莉は嫌そうな顔を向ける。

「まさか、部屋に入れてもらおうと思ってたんじゃないでしょうね？ 入れるわけないでしょう。気持ち悪い」

「……そんなこと、思ってたねえよ」

黙ってしまった響を見て、世莉はため息をついた。

「近くに自販機コーナーがあるから、そこで」

「……お、おう」

響は世莉の後ろについて廊下を歩く。彼女から漂ってくる甘い香りに顔をしかめた。

自動販売機コーナーにはテーブルと椅子が用意されていて、談話室のようにも使われている。幸い人はいなかった。

響はスポーツドリンクを二つ買うと、一つを世莉に投げる。

「なんのつもり？ ご機嫌取りにでも来たの？」

舌打ちして椅子に座ると、乱暴にペットボトルの蓋ふたを開けた。

「……いいだろ、別に」

世莉は手元のペットボトルをしばらく見つめてから、ふっと息をついた。

「そ。ありがと」

響は無視してごくごく飲んだ。世莉が一口、二口飲んで、ふうと息を吐く。

「それで？ 先輩に何か言われた？」

「ああ。もう少し、お互いを知るべきだったさ」

「そう」

会話が途切れる。

長い沈黙に、響は耐えられなくなって口を開いた。

「お前も……あれか？ 家族をエンタメにやられたのか……？」

世莉は口元をタオルで拭ってから、深く息をつく。

「姉よ。もう三年も凍結されてる」

凍結処理か……汚染指数500を超えて感染源として隔離されたってことだな……。  
「うちもそのくらいかな……」

世界の人口の5%が凍結処理された現在、支局員の誰もが多かれ少なかれ、家族や親類、友人や恋人をエンタメによって奪われていた。

「あなた、いきなり《武装》を使ったりして、一体何がしたいの？」

「何って……俺は——俺は患者を助けたい。一人でも多くの患者を現実に連れ戻したい。……でもそれだけじゃないんだ」

「なによ？」

響は世莉をちらりと見てから、目を逸らした。

「笑うなよ？」

「……面倒くさい男……なんなの？」

響はしばらく床を見つめてから、思い切って口を開いた。

「俺は、家族の治療方法を見つけないんだ」

世莉は目を細めて、響を見た。凍結処理された患者を治す方法は存在しない——そのことは治療官でなくても知っていることだった。しかし世莉は、無理だとか不可能だとは言わず、こう聞いた。

「どうやって？」

響は内心の驚きを隠して顔を上げる。馬鹿にされたり、笑われたりするものと思っていたからだ。だが彼女は方法を聞いた。響は左腕のデバイスに触れ、家族のカルテを見せる。

「この〈シグニチャ〉を見てくれ」

エンタメ汚染症患者からは特殊な脳波パターンが検出されるが、そのパターンを色で表現したのが〈感染シグニチャ〉である。〈感染シグニチャ〉は感染元の特徴を受け継いでいるため、感染原因の特定に役立つ。局内では単に〈シグニチャ〉と呼ばれていた。

世莉はカルテを見て、目を細めた。

「〈ビュアホワイト〉……新しく発見された第三の〈シグニチャ〉ね。今、世界中のラボで分析中のはず」

「知ってるのか？」

「馬鹿にしているの？ 潜入治療学会のジャーナルくらい目を通して。今のところ、薬物による感染ではないかと推測されているらしいわね」

〈シグニチャ〉はレッドとグリーンの子系列が知られている。レッド系列は直接発症、グリーン系列は人からの感染を示す。新たに見つかったホワイト系列〈ビュアホワイト〉は、三番目の〈シグニチャ〉として分析が進められていた。

「それで……〈ビュアホワイト〉を追えば、何かわかるのではないかと——そういうこと。」  
響はうなずいて続けた。

「ベユアホワイト」の原因が何なのかまだわからないにせよ、この色を追えば、きっと何かに辿り着く。原因がわかれば治療方法だって見つかるかもしれないだろう？ これは唯一の手がかりなんだ」

世莉は小さく「そう……治療方法ね……」とつぶやき、考えこむように目を閉じる。

しばらくの沈黙の後、世莉は口を開いた。

「私はね……出世したいの」

「出世？」

意外な言葉に響は世莉の横顔を見た。世莉はどこか遠くを見るような目をしていた。

「二十代で管理官になって、医系技官として省庁へ入省する」

「官僚になろうっていうのか？ ……なにかやりたいことがあるのか？」

「それはあなたには関係ない。私がやらなければならぬのは、目の前のケースを片付けて、評価を上げていくことよ。それができない限り、昇進なんて夢のまた夢だわ」

響は話の続きを待つ。

「あなた、家族の治療方法を見つけないなら——私の道具になりなさい」

「はあ？ ……なんでそうなるんだよ？」

世莉が顔を上げ、響にじとりとした目を向けた。

「頭悪いわね……私は一監視官で終わる人間ではないの。私が昇進すれば、いずれ担当する

ケースを選べるようになる。私に従えば、あなたが治療したいケースを選んであげると言っているの」

響は小さくうなる。世莉の言いたいことがわかってきた。

「そうか……お前が昇進してケースを選べるようになれば……」

「あなたは〈ベユアホワイト〉の患者を優先的に治療できるわけ。それに——」

世莉はふんと鼻から息を吐く。

「もし〈ベユアホワイト〉の原因を突き止めることができれば、私はその成果によってさらに出世できる」

「利害の一致ってやつか？」

「そのとおり。幸いあなたには異常なほどのエンタメ耐性がある。それしか取り柄がないとも言えるけれど、あなたの汚染回復力は素直に驚嘆に値するわ。私とその能力を活かしてあげる。あなたなら汚染指数を気にせずに何度も潜ることができるとはどう？ 潜入治療は経験がものを言うわ。私たちはすぐに先輩たちに追いつき、やがて確実に追い越す——私に従えば、〈ベユアホワイト〉を追わせてあげる」

響は圧倒された。だが、その自信に見合うだけの能力をこいつは持っている。

「頭の悪いあなたにも理解できたでしょう？」

響は舌打ちをする。ムカつく奴だ。しかし——こいつなら確かに、〈ベユアホワイト〉の



ケースを用意できるとも思った。

響はしばらく考え、うなずく。

「わかった。お前の提案に乗ってやるよ」

世莉がすっと立ち上がり、響を見下ろした。

「次で、あの忌々しいラブコメを駆除する。いいわね？」

「望むところだ」

\* \* \*

試読版第一弾はここまで。響と世莉のコンビは水嶋のラブコメ（フィクション）を破壊できるでしょうか？

GA文庫「フィクション・ブレイカーズ」は9月15日ごろ発売の予定です。お楽しみに!!